

音を奏で歌う転生者

クレナイハルハ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

歌と音楽に救われた少年、音也 奏。

彼は転生し様々な世界を渡り歩き、歌い続ける

これは彼の奏てる旋律の物語だ

目

次

プロローグ

転生

11 1

プロローグ

目を覚ますと真っ暗だつた

夜なのだろうか？

そう疑問を持ちつつ、周囲を見回す

「奏！起きたのか！」

「え？」

突如として聞き覚えのある声

父さんの声が聞こえた

「奏兄さん！」

「奏ちゃん！」

続いて聞こえたのは妹と母さんの声だつた

だが、回りは真っ暗、だれもいない

聞こえるのは声だけだ

「父さん？母さん？皆何処にいるの？」

すると、突如として聞こえてきた声がぴたりとやんだ

中には、泣くのを我慢しているかのような声が聞こえた

「どうして、泣いてるの？」

「奏、実はな

お前は失明してしまったんだ」

「え？」

……失……明

「……嘘だ」

「奏……」

「…………嘘だよね？」

「…………奏兄さん」

嘘だ、そう思つたが、それだと全てに納得がいつてしまう
そうか、誰もいないんじやない見えないんだ

理解した、その瞬間、とてつもない感情が押し寄せる

悲しみ、苦しみ……絶望した

目から涙が流れた

「……嘘だつて、言つてよお」

この日からだ、生きることを諦めたのは

心が空っぽになつたのは

心から絶望したのは

あるところに、一人の少年がいた

その少年は、目が見えなくなつた

突如として発現した病氣で失明した

少年は絶望した

それから少し時間がたつた
だが少年はかわらなかつた

いつものように、ベットに寝てボーッとする

「ああ……死にたい」

そんなことを呟く

まるで口癖のように僕はそう言葉をこぼしている

点字の勉強にも手を着けず

ただ、ボーッとして1日過ごす

死のうにも、病院だから出来ない

そんなとき、病室のドアをノックする音が聞こえた

「どうぞ」

「失礼しますよ兄さん」

そうしてドアが開くと共に聞こえたのは妹の声だつた
「さゆ、どうしたの急に？僕なんかに時間を使うのはもつたいないよ」
「…………聴いて欲しいものがあるの」

「聴いて欲しいもの？」

「うん、少しじつとしててイヤホンつけるから」

すると右耳にイヤホンがつけられる

「流すね」

「うん」

次の瞬間、聞こえてきたのは静かな歌だつた
まるで、失明を悟った時の自分のよう
そしてだんだんと曲は強くなつていく
まるで、僕を応援しているかのようだ

歌の途中『諦めるな』と言う言葉が聞こえた

いつの間にか、自分の中にあつた暗い何かがなくなつていた
音楽は凄いと思った

この人みたいに、僕も歌で誰かを助けたい
そう思うようになつた

「さゆ」

「ん？」

「ありがとう」

「?……うん、どういたしまして」

あるところに一人の少年がいた

彼は、突如として発現した病氣で失明した

彼は絶望した

だが、そんな彼を救つたもの

それは『音樂』だつた

「?」

あれから、僕は沢山の曲を聞き、歌詞を覚えた
頑張つて点字を覚え、音楽を勉強した
だけど僕の体はついてはくれなかつた
聞こえるのは、医療機器がたてる機械的な音
そして、家族の泣いているような声が聞こえた
手が握られているのがわかる
ああ、もう死ぬのか
結局迷惑をかけてばかり
僕は誰も救うことは出来なかつたのか
「みん、な……ごめん…ね」

「兄さん！死なないで！私は……まだ！」

さゆの泣きそうな声が聞こえた
声を、頼りにさゆの頭を撫でる

「さゆ……ありがとね」

次の瞬間

体から力が抜けるような感覚
そしてだんだんと眠くなつていく

ああ、せめて誰かを
救いたかつた

こうして僕、
音也 奏は死んだ

転生

目の前には真っ白な空間が広がっていた

「あれ？ 目が！」

おかしい、あの日から僕は失明し何も見えなかつたはずそれに僕はしんだんじや
「目が覚めましたか」

声のした方を見ると、まるで女神のような神々しさを纏つた女性がいた

「それでは説明」

「—— 綺麗」

「へ？」

「い、いえ何でもないです！」

「そ、そうですか」

すると女性は少し不満そうな顔をし、話し始めた

「それでは説明しますね、あなたは死にました」

やつぱり僕は死んだのか

「貴方には転生のチャンスが与えられました」

「え？」

「貴方には生前、こう考えていましたね『救いたかった』と
「は、はい」

突如として、女神は語り始めた

「ほとんどの人間が死の間際に抱くのは生きたいと言った欲望です。ですが貴方は、貴方だけは違いました、生命の延長ではなく、他者の救済を求めた」

「……」

「そんな貴方だからこそ、貴方は選ばれました。我欲や妄執に捕らわれない貴方の歌によつてのみ世界を救うことが出来ます。どうか、世界を救つて下さいませんか？」

「そんなこと、決まつてるじゃないか

僕は――

「やります、僕が……救つて見せます！」

「ありがとう」

「そう言つて笑う女神のような女性はとても美しかった

「貴方の決意に私が出来る最大限の贈り物を」

すると僕の回りに五つの光が現れ、光が収まるごとに六つの楽器が現れた

「これは全て神器と呼ばれる楽器です」

「そんなものを頂いてもいいんですか」

「はい、これは貴方の旅路への贈り物なのですから」と
すると、最初に渡されたのはハーモニカだつた

「これは『響律ハーモニカ』。相手を落ち着かせたり冷静にさせることができます」

「響律ハーモニカ……」

触れていると、光になり体の内側に消えていった

「続いて『吹鳴テルフィウス』、こちらは浄化、癒しそして幻惑効果を生じることが出来ます」

「テルフィウス……」

「これはフルートか

さわると、先程と同じように光に体に入つていった

「これは『震弦ガラージ』、切断、雷属性付与、精神高揚効果があります」

「これはギターか、それもエレキギター

「ガラージも体の内側に消えていった

「続いて『彩鍵オクトーヴア』これは曲によつて変化するので、私にも分かりません」

「こんどはキーボード、オクトーヴアも光になり体に入つていった

「最後に『弓弾アメシウス』音符を光弾にして撃ち出すことが出来ます」

今度はバイオリン、アメシウスも体に入つていつた

「そして、貴方には音色を操る能力、楽器を扱う才能
神器である楽器を召喚する力を、これで貴方は男性、女性、中性の声が出ることが出来ます」

「本当にありがとうございます」

「これで、私の贈り物は全てです、そして貴方の楽器はそれぞれに縁を繋ぐことも出来ます」

「縁を?」

「はい、神器で歌つて見てください、きっと答えてくれるはずです」

「はい、来てテルフィウス!」

そう言つて手を翳すとそこには吹鳴テルフィウスが握られていた
テルフィウスを口に当て、吹く

そして、心の中で唄う

「今、奏でよう

我、無限の岐路に佇む者

汝に繫ぐ縁は無く※

私は宙へと手を伸ばす

この声、この歌を聴くなれば答えよ】

すると目の前に光のサークルが現れる

サークルは回転を始めた

サークルから光が溢れる

思わず目を覆う

光が収まつたのを感じて目から手を離すと

そこには白い髪に緑の瞳を持った少女、そして魔法使いのような格好をした女の子が立っていた

「アサシン。ジャック・ザ・リッパー。よろしく、おかあさん」

「お、お母さん？」

「うん！」

「そ、そつか？僕は男なんだけどな」

そう言つて、もう一人の女の子の方を向く

「君は？」

「普通の魔法使い、霧雨 魔理沙ちゃんだぜ！」

「う、うん、よろしくね魔理沙。僕は奏、音也 奏」

「よろしくなのぜ！」

「いきなり二人ですか、これは幸先のいいスタートがきれそうですね」「はい、ありがとうございます」

「それは貴方が運命が導いた事です、それでは転移させますね」

女神のような女性がそう言つた瞬間、体が透けるように透明になつていった
「ありがとうございました！」

「そう言えばまだ名乗つていませんでしたね、私は偶然と宿命の女神、レイミエナです」「え？」

こうして僕は転生した